

(承前) この時期、黒澤明とはといえば、ハリウッド資本での『暴走機関車』『トラ・トラ・トラ』¹の製作が頓挫するという事態に陥り、斜陽化した日本映画界に死中に活を求める意味も込め、木下恵介、市川崑、小林正樹と「四騎の会」を1969年に結成します。そして、国内で初のカラー作品となる『どですかでん』を1970年に発表しますが作品的には黒澤明のナイーヴな面が強調され、これまでの大作とは性質の異なった作品のせい興行的に失敗します。1971年には自殺未遂事件を起こし、次回作『デルス・ウザーラ』がソヴィエトのモス・フィルムの資本で製作され公開されまで4年の歳月を経ることになります。

話をスタープロに戻すと、1968年に『祇園祭』という作品が公開されます。製作は日本映画復興協会で主演を務めた中村錦之助の中村プロが製作協力という形態ですが、日本映画復興協会の代表者が中村錦之助ですので、実質的にはスタープロ作品といえます。この作品は実に複雑怪奇な経過を辿って完成した作品であり、公開から40年を経て復元作業が行われましたが、当時の京都の映画界を攪乱した『呪われた映画』とまで言われた作品です。その経緯に関しては、「人文学報」第115号(2020年6月)(京都大学人文科学研究所)の京楽真帆子(滋賀県立大学)の「映画『祇園祭』と歴史学研究」と同第116号(2021年3月)の紙屋牧子「映画『祇園祭』を伊藤大輔の作家性から再考する」という二つの論文に詳しく述べられています。要約すれば、共産党の京都市議会議員(後に府議会議員)で京都を題材とした小説も手掛ける西口克己という人物が1961年に「祇園祭」という原作小説を出版します。これに伊藤大輔監督(1898~1981)が映画化を東映に持ち込みましたが、予算過多を理由に脚本未完のまま中止が決定しますが、1967年に西口勝己とジャーナリスト竹中労(この人は、「既成の権力や不条理にあがく下層の浪人・庶民のリアリズム」を描いた山中貞雄や脚本家の山上伊太郎に傾注しそのルポルタージュを発表することになります)が京都府と京都市に働きかけを行い自治体を巻き込んだ映画制作の試みが始まります。当時の京都府知事は7期(1950~1978)という長い任期を全うした革新系の蜷川虎三であり、京都府政百年記念事業ということになります。監督伊藤大輔、主演中村錦之助、製作費1億5千万円、同年11月クランク・イン、翌年4月公開の予定でしたが、脚本の問題、スタッフの降板、製作費の調達などで難航し、ようやくクランク・インしたのは1968年8月。その後も、脚本完成の遅れ、伊藤大輔から山内鉄也への監督の交代(山内鉄也はそれまで東映で4本の時代劇を監督した経歴の若手監督であり、筆者にとってはむしろTVの「水戸黄門」シリーズの監督としての印象の方が強い人で

す)、出演者の日程調整、製作費の増大(約3億円)、さらには政治的介入、ロケ現場での暴力団による妨害もあり、まさに艱難辛苦の末に完成しました。稲垣浩の『待ち伏せ』に劣ることもなく、中村錦之助、三船敏郎、高倉健、北大路欣也、渥美清、岩下志麻、美空ひばりといったスターの共演作品でもあります。

このように、『祇園祭』は端的に、大手映画会社「五社」の枠外で製作された作品であるという点において、また自治体を巻き込む画期的な作品であったと同時に、そのことによって、複数の組織からの利害や政治的思惑が交錯してしまった作品です。サイレント時代からのベテランであり、映画界斜陽化のなかでもカリスマ性を保持する稀有な映画人であった伊藤大輔でさえも、製作が具体化していく中で様々な方面からの政治的圧力から逃れられず、人間関係を悪化させ降板に到るまでの経緯は、「公開状」を契機にして、所謂『祇園祭』論争が勃発し、実に半年にわたって「キネマ旬報」紙上での論争が展開します。この論争に加わったのは、脚本を担当した鈴木尚之、清水邦夫、脚本家の八尋不二、映画監督の加藤泰、製作サイドの竹中労といった方々でした。竹中労は監督に大島渚を希望していましたが、原作者からの拒絶にあったとか、様々なスキャンダルめいたことが浮かび上がります。今となっては鬼籍に入った方々も多く真偽のほど不明で「藪の中」です。

付け加えて言うと、本作の配給を行なったのは、新日本興業と松竹映配でした。独立プロの作品であり、反五社協定の立場にあったため、通常の邦画系映画館ではなく、主に洋画の上映を行っていた松竹映配と東急系の新日本興業の経営する映画館での上映だったのです。松竹映配はその名の通り松竹系の配給会社であり、洋画専門の配給を行っていたというだけで五社協定からはずれこの大作の配給を受け持ったのも奇妙な話です。また、映画館でのロードショー期間が終了した後は、フリー・ブッキングの形で全国各地の映画館や市民ホールなどで広く上映されました。

ただ、大ヒットしたにも拘らず、莫大な製作費をカバーするには至らなかったようです。現在でも本作の著作権は京都府が保有している関係か、商業的な動画配信やDVD化はされていません。毎年祇園祭の時期などに京都文化博物館などで特別上映されているようで、見る機会が限定される作品であり呪縛の解けない作品のようです。

中村プロはその後、伊藤大輔脚本・監督で『幕末』(1970年)を製作します。坂本龍馬を描いた意欲作でしたが、史実として周知の内容であり創作の余地のない内容のためか、中村錦之助の大時代的な演技だけが目立ち、そうせざるを得なかった苦衷が窺える作品でした。主演級スターとしては、三船敏郎、仲代達矢、吉永小百合が共演します。(文中敬称略。この項続く)

¹ この作品はアメリカ側からリチャード・フライシャー、日本側から舩田利雄と深作欣二が監督して完成しましたが、リチャード・フライシャーに関して少し書いてみます。というのも、新潮社「波」2026年5月号に蓮實重彦の「リチャード・フライシャーをめぐる」という特別寄稿が掲載されたからです。今年1月にシネマヴェーラ渋谷でリチャード・フライシャー作品『夢去りぬ』(1955)が上映され、それに先立つ氏のトークを基調とした原稿が掲載されました。その中で、蓮實重彦はデヴィュウ当時からフライシャーの国内では少ないと思われる熱心な支持者であることを知りました。この文中で、蓮實重彦はラオール・ウォルシュと同様に、フライシャーのことを「『映画の歴史』はたえず書き直し」を求められている。そして、その「書き直し」が最も求められるのが、とりわけリチャード・フライシャーの50年代ハリウッドの作品だと確信している」とまで言います。また、氏が立教大学で映画の授業を受け持っていたときに若いフライシャー信奉者の学生がいることを発見して狂喜したとあり、その若い学生が黒沢清であったことに驚きました。